

おおさか
KEY
わーど
第35回

翼のある帽子とサンダル

メルクリウスは今日もいそがしい



写真：OMMビルの前にある
メルクリウスの像
(中央区大手前)

大阪の商売繁盛の神として信仰篤いのが、「十日戎」で賑わう「えべっさん」、店舗や事務所に神棚が設けられる「お稲荷さん」だが、近代大阪に祀られた日本伝来ではない商売の神さまといえば、通天閣おなじみのビリケンさんのほかにも、商都の象徴にふさわしい商工会議所の公認と言えるであろう商売の神がいた。メルクリウス(Mercuriu, 英語名マーキュリー)である。

古代ローマの浴場設計技師がタイムスリップして現代日本に出現する、ヤマザキマリさんの漫画「テルマエ・ロマエ」が人気を博し、去年は阿部寛・上戸彩主演で映画化されて、物語の舞台であるイタリアでも封切られたが、メルクリウスも古代ローマの神である。ギリシア神話のオリンポス12神の一人であるヘルメスと同一視され、ヘルメスの特徴である翼のある丸い帽子をかぶり、翼のあるサンダルを履いて、2匹の蛇が巻きついた「カドゥケウス」と呼ばれる杖を持った若者である。父である最高神ユピテル(Jupiter, 英語名ジュピター)の使者をつとめるほか、雄弁であり、商業や盗人の神、旅人の守り神とされた。

大阪とメルクリウスがどこで結びついているかを知るには、中之島に行き、大阪市中央公会堂の屋根を見上げるのがよいだろう。正面の円形の屋根の上で、ミネルヴァとともに商業の神としてメルクリウスの銅像が大阪の街を見下ろしている。大正7(1918)年竣工時の銅像は戦争中に供出されて失われ、現在ある像は近年の公会堂修復で再現されたものだが、当初の像を造るにあたって下図を描いた洋画家の松岡壽の原画(大阪新美術館建設準備室所蔵)にもメルクリウスの特徴的な姿が描かれている。

それだけではない。昭和3(1928)年に認可された大阪商科大学(現、大阪市立大学)の校章も、メルクリウスの翼が市章の“みをつくし”とデザインされている。

これは一橋大学の前身である東京高等商業学校が、明治20(1887)年からメルクリウスの杖を校章に用いたことにさかのぼり、メルクリウスの杖は、東京高商の以後に設立された各地の商業学校の校章にも用いられた。大阪商科大学の場合、大正12(1923)年に第7代大阪市長となった有名な関一が東京高商の教授から市に招かれていたことも関係するかも知れない。二匹の蛇は叡智を象徴し、翼は世界をまたにかけて活躍することを意味している。

さらに大正14(1925)年、大阪毎日新聞社主催、大阪市後援で開催された「大大阪記念博覧会」で10万枚も印刷されたポスターにも、オリンピック選手のように聖火のたいまつをもつメルクリウスと覚しき青年が描かれている。メルクリウスの翼のある帽子をかぶっているし、聖火と混同して描かれたきらいもあるが、高くかかげられた右手がもつのは翼と二匹の蛇の形から「カドゥケウス」の杖だとわかる。

また、昭和10(1935)年に心斎橋筋に竣工した、そごう百貨店の外壁を飾った藤川勇造の彫刻《飛躍》の青年像(現在、大丸心斎橋店北館屋上に移設)も、背中に翼をつけており、メルクリウスと結びつくかもしれない。なかなか近代の大阪人は気宇壮大、国際色豊かで洒落てたんですな。いやいや戦後も、昭和47(1972)年に天満橋のOMMビル(大阪マーチャンダイズ・マートビル)の前に、大阪万博でも展示された彫刻家ジャン・ボローニャ作品《メルクリウス》(フィレンツェ、国立バルジェロ美術館所蔵)の立派な複製が置かれている。

さて、古代ローマで5月15日は商人の祝日「メルクリウスの日」であった。季候の良いこの時期、散策がてら商売繁盛の祈願をかねて、中之島で公会堂の屋根を眺め、OMMへと足を伸ばすのはいかがだろう。